

年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

あなたはぶどう園にまる一日いたのです



今年度の聖書愛読、前半が終わろうとしています。「詩編」を、交互に読み、聞く今回の取り組みは、少し慣れてきたでしょうか。予定では四年間で詩編を読み終えることにしています。詩篇 150 編を読み終えるための長い旅ですが、これからも協力お願い致します。

今週の福音朗読は「ぶどう園の労働者」のたとえですが、ぶどう園が天の国のたとえであるとしたら、ぶどう園の主人に不平を漏らした労働者が見落としていたのではないかと思う点が一つあります。見落とした点を拾って、私たちの糧としましょう。

「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」(20・12) 早くからぶどう園で働いていたこの労働者は、自分が「ぶどう園」というすばらしい場所に一日いたことを、いつの間にか忘れていたのではないか。中田神父はそう考えました。

「天の国」を、イエスは「ぶどう園」にたとえました。天の国に早くから案内されてまる一日いた。たとえ、ぶどう園での時間が暑い中汗まみれになって働く必要があっても、天の国にずっと留まっていたことは間違いありません。ぶどう園の主人(おそらくそれは天の父なのだと思います)がまる一日働くために必要な環境を用意してくれたその中で働いたのです。これは十分感謝できることなのではないでしょうか。

そう考えると、ぶどう園にあとから雇われた労働者は、天の国にたとえられたぶどう園に、わずか一時間しか留まれません。誰も雇ってくれなかった。自分たちを天の国に招いてくれる人に出会えなかったわけです。最後の最後、こんなすばらしい場所に雇ってもらえた。招いてもらった。その感謝の気持ちで、僅かの時間でも懸命に働いたのではないのでしょうか。

この考えに立って、私たちの生活を振り返ってみましょう。私たちの多くは、早くに洗礼の恵みを受けてさまざまな恩恵に与ることのできるぶどう園に招かれました。ぶどう園は、小教区と言っても良いでしょう。このぶどう園で汗を流し、暑い中辛抱して、信仰の実りを実らせ、それを収穫しようとしています。

ひょっとしたら私たちも、自分とは違う導きをいただいて信仰に入った人に不平不満をぶつけているかも知れません。「私たちは長くこの信仰に留まっているのに、途中から来た連中と同じ扱いをされている。」この不平不満は、妥当でしょうか？ 早くから信仰の恵みにあずかってきたこと、早くから、今日まで、ずっと神様の恵みのぶどう園にいた事実を、いつの間にか忘れていたのではないのでしょうか。

「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。」(20・14) 最初に招かれた人も、最後に招かれた人も、天の国に招かれたすべての人が、慈しみ深い主人に覚えられていて、皆が同じ慈しみを受けます。神の慈しみを受ける物差しは、神の側にあります。信頼し、感謝して、神の慈しみにあずかりましょう。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

年間第 26 主日(マタイ 21:28-32)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。